



あの「アパルトヘイト」は消えたのか 人権デュー・デリジエンス(DD)に寄せて

金属労協(JCM)顧問 小島正剛

プロローグ

いま多くの国で、企業の「人権デュー・デリジエンス(DD)」の取り組みが進んでいる。欧州連合(EU)では、それを法制化する事例も現れた。この場合、人権問題は従業員の「結社の自由」を含め、企業倫理・行動の根幹に係わるものであるが、より広くは社会的な課題であり、いたるところで多様な取り組みが進む状況にある。

それでも、脳裏をよぎるのは、かつて「人道に対する犯罪」とされた南アフリカの「アパルトヘイト(人種隔離)」政策である。これには国際社会が対応・糾弾し、国際労働運動は南ア闘争の先頭にあった。金

属労協(JCM)も国際金属労連(IMF、現インダストリアル)のグローバル・キャンペーンに深くコミットしたのである。

本稿は、往時の取材メモも援用してアパルトヘイトを中心に述べ、それが「今は昔の物語」なのかを問うてみたい。人権問題を検討するよすがともなればと思いつつ。

アパルトヘイトの残像

思い起こせば1960年代、金属労協が結成された頃には、「アパルトヘイト(人種隔離)」体制はすでに南アフリカの全土を覆っていたのである。

1970年代に入ると、「バントゥー・ホームランド市民権法」のもと、人口の圧倒的多数のバントゥー(黒人諸民族)は白人居住区

と隔離され、民族ごとに指定された10地域(バントゥースタン、黒人独立国)に強制移住させられたのである。

10地域のうち独立を宣言させられたトランスカイ、ボプタツワナ、ヴェンダ、シスカイの4地域はホームランド(母国)とされ、その住民は外国人として扱われた。その他ガザンクル、カンゲワネなど6地域(ナショナル・ステイツとも呼んだ)の住民も同様に、都市部中心の白人居住区への出入は厳しく規制され、就業(通勤)にも「パス法」による「パス」携行が義務付けられていた。

かれらは教育機会でも差別されており、文盲率は64%。職業訓練の機会も制限され、同じ職場でも白人が上位職、黒人は下位職種に配属されて、昇進の機会もなかった。



平均所得は白人の6分の1に過ぎなかったのである。

「結社の自由」、すなわち労働組合の結成は白人やカラード(有色人)には認められたものの、黒人には厳しく禁止されていた。もとより参政権も無かったのである。

(備考)南アの人口は3140万人。その構成は、黒人2300万人(73%)、白人470万人(15%)、カラード(有色人)280万人(9%)、インド人などア



あの「アパルトヘイト」は消えたのか
～人権デュー・ディリジェンス (DD) に寄せて～

ジア系90万人(3%)であった。カラードには若干の自由が許容された。また、訪問・滞在する日本人は居住権のない名誉白人とされていた。

反アパルトヘイト運動の展開

この非人道的なアパルトヘイトの淵源は、英領下の1911年「鉱山労働法」、1913年「原住民土地法」にあった。そして戦後の1948年、政権を掌握した国民党(白人系)が、アフリカ系諸民族を「隔離・統治」する政策を断行したことで始まっている。その後諸々の厳しい差別的法律が施行されていったのである。

こうした不条理な状況下、反アパルトヘイト運動が起こる。その代表例を見てみよう。

最初のそれは1955年、ネルソン・マンデラ氏らのアフリカ民族会議(ANC)や南ア・インド人会議(SAIC)などによる「自由憲章」採択であった。憲章は黒人民族主義をとらず、広く自由・民主主義を基本としているのが注目された。その中心的活動家らが反逆罪で起訴される一方で、アフリカ民族主義者らはANCから分党し、1959年に汎アフリカニスト会議(PAC)を立ち上げる。

そして1960年、こうした諸政党による反「パス法」集会に警察隊が発砲し、69人の死者を出した。これが国際社会にも衝撃を与えた「シャープビル虐殺事件」である。

政府はこれら政党を非合法化し、1万8000人の活動家を逮捕。マデラ氏は1962年に終身刑を宣告され、ケープタウン沖のロベン島刑務所に拘留されたのであった。

1968年、ステイヴ・ビコ氏の「南アフリカ学生機構」が良心の黒人意識運動を呼びかけ、それが南ア全土に波及。1973年にはダーバンで発生した黒人労働者のストが各地に伝播し、労働運動の統一につながっていく。

1976年、政治意識のたかまるなか、「分離教育」体制に反対する学生らが黒人居住区ソウェトで立ち上がり、「ソウェト蜂起」を起こすと、フォルスター政権はこれを制圧、再び多数の死傷者をだした。

こうして1980年代には、政治的混迷のなか、反体制運動は新興の労働運動を中心に激化する。一度統合した労働組合は再編し、南ア全国金属労組(NUMSA)を核として1985年に南ア労組会議(COSATU)を立ち上げた。1987年には全国規模のストを展開、

翌年にかけて「労働関係法」改悪反対闘争が拡大すると、反アパルトヘイト闘争と一体化していく。

■白人政権に変化

加えて長年にわたる国連やILOなど国際社会の糾弾もあり、ボータ政権が、妥協策として白人、カラード(有色人)、インド人による人種別三院制議会を開設したのは1984年のことだった。1986年にはくだんの「パス法」廃止などの改革を実施したが、反アパルトヘイト運動の波が鎮静化することはなかった。

1989年大統領に就任したデクラーク氏は、長年の国民党政権の政策を転換し、半世紀余にも及んだアパルトヘイト政策の撤廃、社会改革に向けて動く。

1990年、ANC、PACなど政治団体(政党)、学生団体などを合法化し、獄中27年のマンデラ氏を釈放した。こうしてアパルトヘイト政策の廃止を国会で宣言したのは翌1991年2月のことだった。その後3年ほどは、反体制派と体制内改革派との、黒人政治勢力間の武力抗争もあって、体制移行期は複雑な紆余曲折を経ていく。

そしてついに1994年4月、全人種参加、1人1票の総選挙が実

施され、同年5月にマンデラ氏が大統領に就任して、民主政権が誕生するに至るのである。脱退していたILOへの復帰も果たした。

内外労働運動の連帯行動

画期的な情勢変化に重要な組織的役割を果たしたのは、内外の労働運動であった。

世界労連(WFTU)による南ア人権侵害申し立てが、ILOを通じて国連の経済社会理事事に提起されたのは、1966年のことである。

国際産業別組織(ITS、現GUF)の連帯行動も進展した。IMFはつとに1962年、最初の公式ミッションを現地派遣している。当時、労働組合は、未組織状態の自動車産業(多国籍企業)を除き、白人と有色人に見認められ、黒人の団結権は禁じられていた。IMFは、自動車産業が拡大基調にあるところからその組織化に向けて、現地労組との連携に注力する。

そして1969年、フォード、ゼネラル・モーターズ(GM)、ローヴァーの労働者が結集して、自由・非人種主義の南ア全国自動車関連ゴム労組(NUMARWOSA)を結成、1971年にIMFに加盟した。ついでフォルクスワーゲン(VW)、メルセ



あの「アパルトヘイト」は消えたのか
～人権デュー・ディリジェンス (DD) に寄せて～

デス・ペンツ、そして部品やタイヤ製造工場の組織化も成功していく。黒人の雇用も拡大し、かれらの組織も非法ながら着実に進んだ。こうして、1974年、IMFの呼びかけで、金属7組織すべての代表者会議が持たれ、IMF南ア調整委員会(SACC、後の協議会SAC)を結成、緊密な相互連携が確認された。後に人種主義をとらぬ主要4組織は、南ア全国金属労組(NUMSA)を結成している。

1977年IMFミュンヘン大会は、南ア対策を熱く論じる。経済制裁の重要性も視野に入れつつ、IMFは体制変革・民主化には「結社の自由」、労働運動の強化・拡大が必須の方策としたのであった。

注目されたのは、1980年、ウイテンハーゲのVW事業所ストに際し、IMFがドイツ金属労組(IGメタル)と連携し、親企業との間に、現地従業員の解雇を回避し、警察の介入を排除する合意を取り付けたことだった。ストは当時非法であったからだ。1万5000人の黒人労働者は、こうして「ディーセントな賃金」を獲得した。この国の労使関係の在り方に大きくさびを打ったのである。

■マエキソ裁判闘争

そして1986年、IMF南ア闘争の象徴とも言うべき事態が発生する。南ア全国金属労組(MUMSA、当時15万人)のモーゼス・マエキソ書記長裁判闘争である。裁判では死刑判決が懸念されたのであった。この件については、当時本誌でも報告している(1989年第2号)。

かれの家族は、あの「ソウエト蜂起」の地区に近い黒人居住区アレクサンドラに居住していた。住居はといえど、公営住宅といえながら、外壁は錆びたタタン板で覆う粗末なマッチ箱状態。電気も水道もなかった。時おり、辺りに堆積する廃棄物から乾いた異臭が漂った。治安は悪く、当局と通じる一団が反体制派の住民を身勝手な裁判にかけ、これに報復がなされて、相互に血が流された。当時、ガンリンに浸したタイヤを首にかけて火を放つネックレス殺人などもあった。

全国在宅ストなど反体制運動を主導し、逮捕歴もあったマエキソ書記長は、良識派住民とともに自治会を組織する。やがて治安は改善し、未来に希望が生まれる。これも当局の怒りを買う。かれが1986年反アパルトヘイト・キャンペーンでストクホルム滞在中、南ア政府は「非

常事態宣言」を発令した。あえて帰国したマ

エキソ書記長は、反体制派首謀者として即時逮捕・拘留され、国家反逆罪・政府転覆工作罪で起訴されたのである。

IMFはただちにボータ大統領に電報を発してマエキソ書記長の釈放を求め、折からの中央委員会でマエキソ裁判対策を協議、意思疎通を図った。こうして、グローバル・キャンペーンが展開される。

各国から無数の激励の葉書が獄中の書記長に発送され、大統領には釈放要請が山になって届いた。各国加盟組合はそれぞれ行動に入る。フランスでは主要日刊紙全頁広告でボータ大統領宛ての公開質問状を掲載し、米国はマエキソ裁判追跡委員会を立ち上げて、全米鉄鋼労組(USWA)が顧問弁護士を派遣するなどした。

金属労協(JCM)は、中村卓彦議長が南ア総領事に釈放要請をし、当事者間の民主的対話を提言した。IMF国際連帯基金に2度にわたって拠金し、反アパルトヘイト活動の



南ア・黒人居住区アレクサンドラにて右端筆者(1986年4月)

一環として鉄鋼連盟に南アからの石炭・鉄鉱石輸入の一時凍結、電機経営者団体にはパソコンの南ア向け輸出の自粛を要請した。

当時日本は対南ア貿易では世界第1位となっていた。国連は1988年に「南ア経済制裁決議」を採択。アパルトヘイト特別委員会のガルバ委員長は名指しで日本の突出した南ア貿易に遺憾の意を示していたのである。やがて南ア貿易額は減少に転じたのであった。

1988年末、2年半におよぶマ



あの「アパルトヘイト」は消えたのか
～人権デュー・ディリジェンス (DD) に寄せて～



南ア金属労働者のスト集会 (2021年10月インダストリアル・ニュース)

NUMSAと インダストリアル

エキソ書記長の獄中生活は終り、無罪釈放を勝ち取る日が来た。書記長の名も世界に知れ渡り、死刑回避は反アパルトヘイト闘争の象徴となつて、体制廃絶に結びついていったのである。

1991年、マンデラ氏(当時ANC議長)は、IMFミッションと対話の折、「労働運動は、結社の自由の結晶。もつとも組織された民主勢力」と評して、多年にわたる連帯に深い謝意を表したのであった。

あのNUMSAは、いまどうしているだろう。かつてIMFミッションとの交流時、「IMFにあって、持ち場でベストを尽くすのが国際連帯の基礎」と語り合つた活動家たちは、もう現役を退いている。

しかし、組織のエネルギーは、厳しい環境下でも、依然健在のようだ。昨2021年10月、鉄鋼・機械産業部門で3週間にわたる

厳しいストを闘い抜き、3年協約を締結、賃上げ6%を獲得している。

そして南アといえば、インダストリアル第3回世界大会は、同年9月、南アで開催予定であった。それがウェブ開催となつたのは周知の通りである。役員改選のなかで、3人の書記次長が選任された。

その1人にNUMSAの女性活動家クリスティン・オリビエさんの名があった。ブライアン・フレデリックさん以来の南ア出身である。ちなみに日本から松崎寛さんが選

出されたのは周知のところ。鎌田普さん以来の日本出身である。もう1人のケマル・ウズカンさん(トルコ出身)ともども、良きチームワークが期待される。

新年度においても民主主義擁護や人権問題は、運動課題の一つだ。冒頭に触れた「人権デュー・ディリジェンス(DD)」の取組みも、労働の世界で必須である。指摘するまでもなく、その根幹でもある組合組織の基本権が、何らかの形で抑制されている国は70%、団体交渉権のそれに至っては80%にもぼる現実があるからだ。

ちなみに、インダストリアルが多国籍企業との間に締結してきた数十にのぼる「グローバル枠組み協定(GFA)」は、サプライチェーンを含め、基本権認知を当然の基礎として成立しているのであり、一層の締結拡大が期待される。

エピソード

以上、アパルトヘイトを中心に記述した。意識していたのは、執筆時点の3月21日が、「国際人種差別撤廃デー」であることだった。あの「シャープビル虐殺事件」を機に、国連が制定した記念日である。この日、各国で関連行事が展開されて

いる。人種差別、外国人排斥や少数民族への差別、そして、社会格差や人権侵害が複雑化している状況に思いが至る。「人道に対する犯罪」すらなしとしない。

アパルトヘイトは「今は昔の物語」、なのか。物語はまだまだ終わっておらず、いたるところに、その影を落としているように見えるのは僻目(ひがめ)だろうか。

(参照資料)

IMF, IMF 1893-1993, The First Hundred Years, Geneva 1993.

筆者南ア取材メモ(1986-1993年)、ほか。

(2022年3月21日記)

●金属労協顧問

小島正剛 こじま・せいごう

60年IMF(国際金属労連)日本事務所に入職以来、金属労協事務局長代理、同国際局長、同副議長(国際委員長)(以上IMFとの兼務)、IMF地域代表を務めるなど国際労働運動一筋。98年金属労協顧問に。日本労働ベンクラブ前代表代理他。主要著書「グローバル連帯 落穂拾い」他。